

新刊紹介

R・グルッセ著 濱田泰三訳

『仏陀の足跡を逐って』

今回、René Grousset (一八八五—一九五二)の“Sur les traces du Bouddha”が、『仏陀の足跡を逐って』という書名のもとに、浜田泰三氏によって訳出された。

グルッセ氏については、かつての大谷大学学長、故山口益先生がつねに親愛の情をこめて、フランス留学当時以来のことを私どもに語って下さったことであった。山口先生は昭和二年(一九二七)から四年(一九二九)までの二ヶ年半をフランスに留学されたが、その大部分の間、当時ギメ博物館の副館長であったグルッセ氏の家庭に起居され、グルッセ氏や御家族と篤い友情を結ばれた。そこでの会話に、ヨーロッパ東洋学の動向を聞き知ることが多かったとは、先生の語り草であった。

この書物も山口先生がグルッセ家に滞在中にグルッセ氏が執筆されたものである。扉には“à Susumu Yamaguchi Professeur à l'Université Otani de Kyôto R. G.”

(大谷大学教授 山口益氏に ルネ・グルッセ)とあり、山口先生に献呈されたことになっている。山口先生は『フランス仏教の五十年』の中に、グルッセ氏への想い出とともにこの書についても触れておられ、それは、グルッセ氏と山口先生との学問的交流による友情を示すものに他ならない。

この書は一九三二年にはすでに英訳され、フランスでは文庫本(叢書O/8)にも入っていて、本屋の店頭で見かけたものである。また、一九七七年にはギメ博物館からも出版されて、息の長い本となっている。

山口先生がこの書物を引き合いに出されることはしばしばであったから、つとに翻訳のことも考えるべきであったのに、怠慢に過ぎている間に、このたび『叢書 仏教文化の世界』の一環として、浜田泰三氏によって訳出されたことは、その大いなる努力の賜に他ならない。改めて深い敬意の念を表すとともに慶賀に堪えない次第である。そしてこの訳出によって、フランス東洋学の高峰のひとつが、私どもの前にその全容をあらわすことになったわけである。

グルッセ氏の東洋学への造詣と博識、加えてフランス人らしい文化史に対する鋭い眼とヒューニテに満ちたこの書は、一九二九

年の初版以来半世紀を経て、今なお私どもに学問の方法を示して語り続ける。学問の方法の曲がり角である現在に於て、あるいは、今こそ読み返してみる必要があるのであらう。

書名の『仏陀の足跡を逐って』というのは、玄奘(六〇〇—六六四)が仏陀の法を求めて、想像を絶する旅を為しとげたその跡を、旅行記『大唐西域記』によって叙述したものである。玄奘以外には、義浄(六三四—七一三)や玄照(六五〇頃)の求法の旅についても触れるところがあるが、その骨子は玄奘の『西域記』にある。そして叙述は、文化史的にまた美術史的に、グルッセの東洋学上の広い知識を駆使して行なわれ、かつヒューニテに満ちていて読む者をして楽しませる。

フランスにおける『西域記』の研究は、十九世紀の半ばに S. Julien によってフランス語訳が為されたのに始まり、P. Pelliot の研究課題の一つであったというが、グルッセ氏のこの書は『西域記』を、より一般的に紹介する役目を果たすこととなった。

グルッセ氏は七世紀頃のインドと中国との接触を、驚異の眼を以て讃嘆している。文明の黄昏であったその頃の西欧にくらべ、

はるかな極東の地に開いた高度の文化と、人間精神の昇華に対してである。それはアテナやアレクサンドリアにも匹敵する恵まれた時代であったと、グルッセ氏はいう。玄奘という求法僧の旅行記によりながら、グルッセ氏は西域やインド、またそこからひろがるボロブドール、法隆寺の仏教美術に思いをはせているのである。

本書の中には、しばしば A. Foucher の仏教美術に関する説が引用されているが、Foucher はガンダーラの仏教美術を、ヘレニズムによるギリシヤ様式をかりたものであることを明示したのであった。グルッセ氏のこの書も、そうしたフランス東洋学の華やかであった頃の学説を映し出しているが、とくに第六章「ギリシヤ的仏教の国にある」には、グルッセ氏の眼が光っている。博識のグルッセ氏のこの書は、読みあげるのに根気が要るが、この書を翻訳された浜田氏に心からの御礼を申し上げたい。

(A5版・三九三頁・金花舎・昭和五十八年刊・八〇〇〇円)

(白土わか)

廣瀬 杲著

『廣瀬杲講義集』

第一・二・三・四・五巻

本書は、著者が主宰する私塾「開光学会」の研修会(第一・二巻は二月の研修会。第三・四・五巻は七月の夏期合宿)における特別講義の筆録である。この五巻には、昭和46年より51年迄の間の特別講義が収録されている。各巻のタイトルは、

第一巻 「僧宝の成就——宿業——」(昭和59年9月1日発行)

第二巻 「唯仏一道の開顯——教相判釈——」(昭和59年3月20日発行)

第三巻 「根源的能動——本願——」(昭和58年4月30日発行)

第四巻 「偏依と独存——諸仏称名——」(昭和57年6月10日発行)

第五巻 「宗教心——二河譬——」(昭和57年10月1日発行)

57年10月1日発行)

となつてゐる。これは各研修会のテーマとして掲げられたものであるが、そこには旧来の論題は副題とされ、主題は著者自身による表現がなされている。それは、「その

内部だけでわかり合っているつもりで語られている言葉というものを、一度、現代の社会の中で、あるいは人間の問題の中で言い直してみたいですか、一遍言い直すことを通して、再確認をしてみたいわけがあります。」(第三巻・一頁)という著者の基本姿勢を表わすものである。つまりそれは、専門語を自明の事として巧妙に説明してゆくことで事足りりとしてしまわないで、その様な操作の内でも何時も未解決のままに取り残されている苦悩の人間(自己)に正直に眼を開いて、そこにおいて仏教を再確認するということである。したがって、仏教の言葉を再確認するということは、「私はいったいどうなればいいんだ、私はいったい何を明らかにしてもらえばいいんだ」(第三巻・三〇頁)ということを再確認するということに他ならないのである。

本書において著者は、対象化された仏教の学びということに対して強い危惧を表明している。何故ならば、仏道の問題とは徹底して「求道に立つ者の常なる今日の課題」(第一巻・九頁)としてのみ明らかとなる事柄であり、対象化された途端その生命を失する事柄であるからである。それ故に、対象化され、他人事と成つてゆく仏教の学